

温暖化、トウモロコシに悪影響

福島大と農研機構 研究

低所得国、収量の伸び半減も

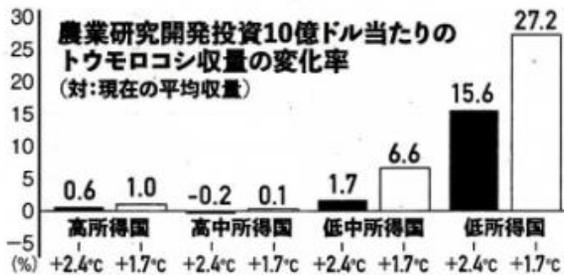
福島大と農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）は茨城県つくば市に9日、将来の気候変動がトウモロコシ収量に与える影響の研究結果を発表した。低所得国で今世紀半ば（2041〜2060年）の平均気温が2・4度上昇した場合の増加率は15・6%で、1・7度上昇時の増加率27・2%に比べ半分程度にとどまる可能性がある。研究チームは「気候変動の緩和が不可欠」と訴える。

福島大共生システム理工学類の吉田龍平准教授と農研機構の飯泉仁之直（としちか）上級研究員が、各国のトウモロコシへの影響を解析した。生産量が年10万ト超の71カ国を対象で、日本は含まれなかった。今世紀半ばの平均気温が産業革命以降の1850〜1900年の平均と比べ①1・7度上昇②2・4度

上昇の二つのシナリオで農業研究開発投資10億ドル当たりの変化率を算出した。結果は「グラフ」の通り。高所得国では1・7度上昇の場合は1・0%増、2・4度上昇の場合は0・6%増となる。

福島市の福島大で9日に会見した吉田、飯泉の両氏は「気候変動が進んだ場合、

低所得国では農業投資の効果が減少する。世界では人口が増加しており、食料生産性の向上が求められている。気候変動の緩和が不可欠」と強調した。



※この画像は当該ページに限って福島民報社が利用を許諾したものです。

[問合せ先]

福島大学共生システム理工学類
吉田龍平

E-mail:yoshida@sss.fukushima-u.ac.jp